

インバウンドの波を乗りこなすには 第1回 東北や宮城におけるインバウンドの現状と課題

東北学院大学 経営学部経営学科
教授 森下俊一郎 氏

近年、仙台駅周辺やアーケード通り、松島海岸で外国語の会話を聞くようになり、大きなスーツケースを持った外国人観光客を見かけるようになりました。また、テレビやネットなどのニュースで「インバウンド」に関する話題が頻繁に取り上げられています。今回から3回にわたり、インバウンドについて解説します。

1. 日本におけるインバウンドの現状

インバウンドとは訪日外国人観光客、すなわち、外国人が日本に来て観光旅行をすることやその客を言います。逆に、日本人が海外へ旅行することをアウトバウンドと言います。訪日外国人観光客数は、2013年までは1000万人に満たない水準でしたが、2014年以降急増し、2019年に3188万人、新型コロナウイルスが蔓延した2020～2022年は激減したものの、2023年に2507万人、2024年には3687万人と過去最高でした。日本政府は2030年までに訪日外国人旅行者数を6000万人とすることを政策目標としています。ちなみに日本からの出国者数、アウトバウンドは2024年には1300万人で2000年頃と変わらず、コロナ前である2019年の2008万人のレベルに戻っていません。

訪日の多い国は順に、韓国、中国、台湾、香港、アメリカ、タイ、オーストラリア、フィリピン、マレーシアで、近年ではアジア諸国からの入国が増えています。理由として、アジア諸国の国民年収が増え、海外旅行をする経済的余裕ができたこと、国内の主要空港から日本へのLCC（Low Cost Carrier：格安航空会社）の運行便が増えたこと、査証（ビザ）発給要件が緩和されたことがあげられます。世界的にも日本は円安かつ物価安、また、「世界で旅行したい国・都市ランキング」の類で常に上位にランクインし、欧米豪からの訪日客も増えています。

今後、わが国の少子高齢化により日本人観光客が減る一方で、訪日外国人観光客は、ゴールデンウィークや盆暮れ正月、土日祝日に関係なく長く滞在し、比較的値段

を気にせずに消費をしてくれる特徴があります。ホテルや旅館をはじめ観光産業では、日本人観光客の閑散期に訪日外国人観光客を上手く取り組むことで、稼働率を平準化させることができます。わが国の観光産業の規模は、1番手の自動車産業とはかなりの差があるものの2番手です。また、日本の外国人旅行者受入数は世界12位（国連世界観光機関2019年）であり、まだまだ訪日外国人観光客数は伸びると考えられます。

2. インバウンドの課題ーオーバーツーリズムー

訪日外国人観光客が増えることは必ずしも良いことばかりではありません。外国人観光客が特定の観光地に押し寄せ、地域住民の生活に悪影響を及ぼすことをオーバーツーリズムと言います。京都や渋谷の街を外国人観光客が埋め尽くす映像や写真を見たことはありませんでしょうか。最近ではオーバーツーリズムを「観光公害」と日本語に訳しています。オーバーツーリズムは地域住民に次のような悪影響を与えています。

まずは地域交通機関への影響です。大きなスーツケースを携えた観光客がバスなどの公共交通機関に押し寄せると、地元の通勤通学者がバスに乗れなくなったり、乗降に手間取り遅延が多発します。外国人観光客が多い観光地の宿泊施設や飲食店では価格が高騰し、日本人客にとって手ごろな価格の宿が見つからない、地元住民は気軽に外食を楽しめない状況になっています。文化や慣習が異なる外国人観光客のマナーの悪さも目にします。繁華街のコンビニ前で外国人が集団でたむろしながら飲酒して騒いだうえに空き缶を放置、電車やバスの中での大声の会話、個人宅の敷地や侵入禁止・危険区域への立ち入り、文化財への落書きなどが散見されます。仙台市の温泉旅館では外国人客に部屋の備品、高価なものではテレビを持っていかれた、松島海岸では公衆トイレの使い方が汚い、商品を買わずにいじくりまわすなど、宮城県内でも様々な問題を引き起こしています。山形県の銀山温泉のように温泉街への住民以外の車の侵入禁止措置や夜

間の立ち入り人数を制限するなど、様々なオーバーツーリズムへの対策を講じる地域も見られ始めています。

3. 東北や宮城におけるインバウンド —訪日外国人観光客の訪問先の地域格差—

ここ10年で急激に訪日外国人観光客が増えたため、その受け入れ体制や地域住民の感覚が追いつかない状況が散見されています。しかし、そうしたオーバーツーリズムは一部の地域に限られています。

外国人客の延べ宿泊数（2023年）が多い都道府県は順に、東京、大阪、京都、北海道、福岡、沖縄、千葉、神奈川、愛知、長野で、トップ3（東京、大阪、京都）だけで60%以上を占めます。一方、宮城県は19位で、全体の約2%とかなりの偏りがあります。また、訪日外国人観光客が利用する空港は、成田・羽田・関空だけで75%以上を占めています。東北内を旅する外国人観光客が東北にある空港を利用する割合は20%程度で、首都圏などでの旅行ついでに東北や宮城に立ち寄っていることが考えられます。

東北や宮城県への外国人観光客を国別でみると台湾が半数弱で、地元業界では「台湾一本足打法」と自虐しています。東北各地の自治体やDMO（Destination Management/Marketing Organization：観光地域づくり法人）などは、これまで台北など台湾の都市で積極

的にPR活動を行い、台湾から東北各地の空港へ直行便があり、従来の日本観光に飽きたリピーターが、東北や宮城を訪問していると想定されます。もし仮に日台関係が悪化するならば、東北や宮城の観光業界は大打撃を受けるでしょう。

先日、中国在住が長い旧友に、中国から東北や宮城への訪日が少ない理由を聞きました。中国人が「東北」と言われて連想するのは、昔、「満州」と呼ばれていた中国の東北部で、日本の東北、宮城県や仙台市を知っている中国人は少数とのこと。日本人が知っている中国の都市として北京や上海しか直ぐに思い浮かばないのと同様、外国人には東京と京都・大阪以外はあまり知られていません。訪日客数の多い中国や韓国、消費額や宿泊日数の多い欧米豪に、いかに東北や宮城をアピールし、来てもらうかが課題です。

観光庁が2024年に改定した観光立国推進基本計画の柱として「地方誘客促進」の他、「消費額拡大」が掲げられています。これまで訪日外国人観光客「数」を目標にした施策を行ってきましたが、これからは一人当たりの消費額を拡大しようとする考えです。東北や宮城には、魅力的な観光資源が多々あります。これらを上手くアピールして、より多くの外国人観光客に東北や宮城の歴史や文化、自然、食を堪能して欲しいものです。

参考文献

- 国土交通省観光庁（2024）『令和6年度版 観光白書』昭和情報プロセス
- 沢登次彦編（2025）『とーりまかし（79号）』じゃらんリサーチセンター

〈プロフィール〉

東京都出身。早稲田大学社会科学部卒業後、日本ヒューレット・パッカード（株）にてアナリストやプロジェクトマネージャー等に従事、勤務の傍ら早稲田大学大学院社会科学部研究科にて顧客志向経営を研究テーマに博士（学術）取得。九州産業大学地域共創学部観光学科にサービスマネジメント担当教員として着任し、勤務の傍ら北陸先端科学技術大学院大学にて、宿泊業におけるおもてなしの知識の創造と共有に関する研究で博士（知識科学）取得。2023年から東北学院大学経営学部に着任し、東北地方の観光地や温泉地へ訪日外国人観光客や若者を誘客する街づくりや地域経営について研究。近著に『おもてなしの理念、知識、異文化のマネジメント』（晃洋書房）。

